
男の子たちとブリキ人形

阪野隆平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の子たちとブリキ人形

【Nコード】

N7309J

【作者名】

阪野隆平

【あらすじ】

喧嘩をしている三人の男の子。そこに謎のお爺さんがやって来て――。

昔々のお話です。

あるところに三人の男の子がいました。男の子たちはお互い仲が悪く、いつもいつも喧嘩ばかりしていました。

ある日のことです。

この日もまたいつものように喧嘩をしていると、見知らぬお爺さんが近づいて来ました。

喧嘩をしていた男の子たちですが、お爺さんのことに気づくと、殴ったり蹴ったりを止めて大人しくなりました。大人のことだから、喧嘩をやめさせるため、けど細かい事情を聞くのは面倒なので、とりあえず全員のことをまとめて叱り、その場を無理矢理おさめるを知っていたからです。

しかし子どもたちの心配は杞憂に終わります。
お爺さんがこう言ったからです。

「どうして喧嘩を止めるんじゃない？」

一人目の男の子が答えます。

「こいつらが僕のブリキ人形を壊したんだ」

男の子の手の平には脚が折れて、歩けなくなったブリキ人形が転がっています。傷がほとんどないことから、まだ新品のようです。

二人目の男の子が言います。

「そいつに見せてくれ、て言ってもイジワルして見せてくれなかったんだ。だけど僕は見ていただけさ。盗ったのはそいつだ」

男の子はもう一人の別の男の子に指さします。

三人目の男の子が言います。

「僕は盗りたくなかったのに、そいつが」

「なんだとっ！」

二人目の男の子が三人目の男の子に掴みかかろうとします。

再び喧嘩が始まりそんな中、お爺さんが宥めるように言います。

「ほう。お前たち全員がブリキ人形を持っていないから喧嘩をしていたのか？　そうかそうか、なら丁度いい」

お爺さんはそう言うと、懐からまったく同じ形のブリキ人形を三体取り出しました。そのどれもが新品で、キラキラと輝いています。

「これで喧嘩する理由もなくなるじやろう。ああつと、ネジはまだ回してはイカンぞ。一つ、気をつけねばらんことがあるからな」

相変わらず穏やかな顔のお爺さんでしたが、声を低くし少し強い口調で説明します。

「これらのブリキ人形はそれはそれは特別な物でな……一度ネジを回すと、二度と回すことができません」

「それじゃあ使い捨てじゃないかっ！」

一人目の男の子が怒った声を上げますが、お爺さんは大声に動じることなく続けます。

「安心せい。一度ネジを回すと二度と回せんが、その代わりにずっと動き続ける。お前さんたちが生きている間は、な」

男の子たちは顔を見合わせます。お爺さんは「どうじゃ、欲しいか？」と問いかけます。男の子たちはしばらく悩んだ後、三人同時に同じ回答をします。

「「「もらいますっ！」」」

お爺さんはなにが嬉しいのか、ニコニコとした笑顔で「そうかそうか」と言っ、ブリキ人形を手渡しました。渡し終えた後に、最後の忠告をします。

「当たり前のことじゃが、そのブリキ人形は大切にするんじやぞ。おもちゃとはいえ、最後まで責任を持たんといかん。壊してしまったりしたら、すぐに天罰が降ってくるぞ。もしも捨てたくなったら、ワシがこれから行く道のほうへ向け、ブリキ人形を歩かせればいい。ワシが拾うことができる、お前たちの代わりに最後まで責任を持つ。ワシが拾えればじゃからな。そんなことがないと祈るがな」

三人はお爺さんの前では「はい」と元気よく答えましたが、内心ではこう考えていました。

一人目の男の子はこう考えていました。

「どうせ脅しだ。飽きたら適当に捨ててしまおう」

二人目の男の子はこう考えていました。

「お爺さんの言うとおり、飽きたらそうしよう」

三人目の男の子はこう考えていました。

「お爺さんの言うとおり、最後まで責任を持とう」

お爺さんが森へ去った後、三人は家に戻ってブリキ人形のネジを回します。ブリキ人形の脚は最初はゆっくりと、徐々に速く動いていきます。そしてブリキ人形はお爺さんの言ったとおり、起きている間はもちろん、一晩中、朝になってもずっと動き続けていました。

男の子たちは最初のうちこそ、「すごいすごい」とブリキ人形に夢中でしたが、次第に飽きてきました。

ブリキ人形に飽きた一人目の男の子は、他の二人が見ている前で、人形を川にへと投げ捨てました。

「て、天罰が降ってくるってお爺さん言ってなかったか？」

二人目の男の子が言います。もう一人の男の子も頷きながら言います。

「ど、どうするんだよ、死んじゃったら！」

しかし一人目の男の子は、二人の男の子の驚いた顔を見ながら笑います。

「じゃ、今から少し待ってみるか？ 天罰が降ってくるかをさ」

男の子たちは空を飛ぶ小鳥の群れが見えなくなるまで待ってみました。

なにも起きません。

「ほら、天罰なんて起きないじゃないか！」

一人目の男の子が大声で笑いながら言いました。

その日の晩のことです。突然の大雨によって川が氾濫し、一人目の男の子は川に流されてしまいました。翌日になって、男の子は死体に発見されました。背中には大木が突き刺さって、まるでブリキ人形のようにでした。

二人目の男の子はそれを見て、ブリキ人形が怖くなり、お爺さんの言ったとおりに捨てようと決心します。

お爺さんが去っていった方へ、動き続けるブリキ人形を歩かせます。するとどこからか野良犬がブリキ人形を銜えて森にへと走り去っていきました。

「こ、コラ待てっ！」

もしもお爺さんにブリキ人形が届かなかったら、一人目の男の子みたいになるかもしれません。二人目の男の子は慌てて野良犬を追

いかけます。

野良犬を必死に追いかける二人目の男の子は、いつの間にか森に入ります。目には野良犬しか映りません。しかし、野良犬しか目に入っていなかったため道の先に崖があることに気づかず、転げ落ちていってしまいました。

不幸なことに崖の下にあった大木の枝に、男の子の身体は貫かれ、一人目の男の子と同じく死んでしまいました。その姿は、まるでブリキ人形のようにでした。

三人目の男の子は気づきます。

自分以外の二人はブリキ人形を大切に扱わなかったから死んでしまったんだ。だから、自分はブリキ人形を大切にしよう。

三人目の男の子はそう決心し、ブリキ人形をずっと、大切に持ち続けました。

ブリキ人形は三人目の男の子がお爺さんになるまで動き続けました。死ぬまで動き続けました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7309j/>

男の子たちとブリキ人形

2010年10月11日15時16分発行